うもれ木

魚津埋没林博物館広報誌
第21号
発 行 日：平成17年1月15日
編集発行：魚津埋没林博物館
印　　刷：魚 津 印 刷（株）

魚津の森に　ゾウ出現？

ある日、森の中、ゾウさんに出会った…写真は、魚津市の山中で出会ったブナの木。鼻を振り上げたゾウがウィンクしているようです。「何がどうしてこうなっちゃたの?」と、思わず問いかけたくなるほど不思議な形です。雪などの影響で幹が折れた跡と言ってしまえばそれまでですが、自然のいたずらを前に、理屈ぬきに笑ってしまいました。

埋没林博物館展示の
ナウマンゾウ模型

木の顔、木の表情

学芸員 石須秀知

自然は、時として思いもよらない造形を見せてくれます。特に樹木は、長い年月成長を続ける間に、外界の刺激への反応や、自らの遺伝情報などを反映したさまざまな形を現出させます。そして、樹木の形から、その場所の環境や人為の影響を推理する手がかりが得られる場合もあります。ここで、ユニークな形をした樹木の写真を並べて、紙上ミニ展覧会を開いてみたいと思います。皆さんも、その樹木の形の裏にどのような情報が隠されているか、考えてみてください。

スギ

人が岩に腰掛けているような形のスギの根。これは魚津市の山中に生育する“洞杉”と呼ばれる一群の天然スギの中の一つです。洞杉は、斜面に点在する大きな岩の上に生育しているのが一つの特徴です。岩の山側に生えたスギが、数メートルにもなる冬の積雪の圧力に押されて岩にのしかかるように生育したものと考えています。数百年間、毎年繰り返される雪の力の大きさと、それに対向し適応したスギの力強さを感じてください。

雪国に生育する樹木が雪の力によって“根曲がり”になることはよく知られていますが、次の写真のトチノキは、曲がりを通り越して“曲がりくねり”になってしまっています。

トチノキ

曲がりの方向が何度も変わっていることから、単純な雪の力だけとは考えにくく、他の力も働いていると思われます。どのような力が働いてこんな形になったか、想像力を働かせてみてください。

曲がった幹ということでいえば、表紙のブナもそうですが、次のハウチワカエデも大変な曲がり方をしています。

ハウチワカエデ

折れた幹が、ぐるりとほぼ1回転しています。枯れた幹の芯が残っているので、折れたときには、皮がむけるようにしてぶら下がっていたのではないかと想像できます。そして、丸く曲がった部分は、上部の重さに耐えられるように、他の部分より太くなっていることが読み取れます。

次に登場するトチノキは、どう見ても“ひょっとこ”の顔です。

トチノキ

折れた枝の芯が腐って空洞になり、周囲から樹皮が巻き込んで傷口を覆ってきています。それがちょうどひょっとこの突き出した口になり、幹に刻まれたしわが、ちょっと悲しそうに顔をしかめたような表情を作っています。その口の中からは、つる植物のイワガラミが芽生えて伸び始めています。このトチノキがこの先何年間生き続けるかは分かりませんが、成長するにつれてこの顔の表情も変わり、やがては消えていくと思われます。

最後はまた別のトチノキです。地上2メートルほどの高さまでは、幹周りが5メートル近くあるどっしりとした大木ですが、その上部では主幹がなくなり、数本の細い幹が株立しています。

トチノキの大木

主幹がなくなった部分は空洞化し、その周囲が異様に盛り上がって、縄文時代の火焔土器を思わせる形です。幹が途中でなくなるような大きな変化を引き起こすものに雪崩がありますが、この写真を撮影した場所は、大きな雪崩が襲うとは考えにくい地形です。このトチノキの場合は、人による伐採で幹がなくなったのではないかと思われます。なぜもっと下の根元から伐採しなかったのかといえば、雪の上を滑らせて木材を運ぶために、硬く締まった残雪が十分にある時期に伐採したのでしょう。主幹がなくなっている高さは、伐採時の雪の深さに対応していると考えられます。

森を歩けば、無数の木が生えています。同じ種類の木でも、1本ごとにその表情が違います。その表情の違いが何によって作り上げられているのか、周りの様子などと合わせて観察してみると、森や木の歴史について想像が膨らんでいくのではないでしょうか。

シリーズ

埋没林の仲間たち ⑳

ハマヒルガオ（ヒルガオ科）

ハマエンドウやハマニガナなど初夏の砂浜を彩るいろいろな海浜植物。そのひとつに、ハマヒルガオがあります。ハマヒルガオは、市街地や公園などで普通に見られるヒルガオの仲間で、花はよく似ています。

他のものに巻きついて立ち上がるヒルガオとは違って、ハマヒルガオの茎は地表をはって広がり、砂浜の一画を覆うほどの大群落を作ることもあります。その葉は丸くて厚く、乾燥や塩分、強風で打ち付けられる砂など、海岸の悪条件に耐えられるようになっています。

群生の様子

花

ハマヒルガオは、本来海岸に適応した植物ですが、より内陸の道路や鉄道沿いなどで見られる場合もあります。太陽が照りつけ乾燥しやすいという、他の植物には過酷な環境が海岸と共通しているのでしょうか。

＊　＊　＊

ハマヒルガオは、現在の魚津市内では一部の砂浜や海岸の護岸の隙間、道路沿いなどに生育しています。

魚津埋没林では、昭和27(1952)年の発掘調査でハマヒルガオの種子が検出されています。

お知らせ

●平成16年度の行事予定

☆企画展示

魚津ナチュラルギャラリー⑤ ── 1月2日(日)～4月30日(土)

☆ふれあい学習会

冬の蜃気楼ウォッチング ─── 2月13日(日)

※企画展、学習会の詳細は下記までお問い合わせください。

ご利用案内

○開館時間　午前9時～午後5時（入館は4時30分まで）
○休 館 日　12月～3月の月曜日、祝日の翌日、年末年始(4月～11月無休)
○入 館 料　・大人(高校生以上)・・・510円　・小中学生・・・250円
○交　　通　・JR北陸本線 魚 津 駅 ・富山地方鉄道 新魚津駅 } 下車1.5km (タクシー・・・5分 徒　歩・・・25分)
・北陸自動車道魚津ICから3km車で10分

特別天然記念物 魚津埋没林博物館
〒937-0067 富山県魚津市釈迦堂814 ☎(0765)22-1049
ホームページ　http://www.city.uozu.toyama.jp/nekkolnd/
e-mail　nekkolnd@city.uozu.toyama.jp